

みずのき作品群の保存とアーカイブ作成への協力と作業支援

2018年度活動報告

2016年度よりスタートした本研究は、2年目となる昨年度から芸術資源研究センターのプロジェクトのひとつとして活動を続け、3年目となる本年度が研究の最終年度となりました。この間、京都市立芸術大学特別研究助成を受け、学内の共同研究者に加え、みずのき美術館関係者および学生を中心とした作業協力者が参加し、みずのき作品群の保存とアーカイブ作成への協力と作業支援を行ってきました。なお、本研究の対象である「みずのき寮絵画教室」「みずのき寮絵画クラブ」の作品群や活動の概要については、昨年度の活動報告をご参照ください。

本年度は、昨年度からの継続として「みずのき寮絵画クラブ」の作品を中心にアーカイブ・データ作成のための作品調査と画像撮影の協力を行いました。当初は本年度予定分の約4500点の作品について採寸、描画材料、保存状態などの調査と作品表裏面の画像撮影を行い、本研究の対象作品約18000点のアーカイブ・データ作成を終える計画でしたが、これまで未整理であった作品がさらに約1500点余あることがわかり、追加分を含め約5400点（約10800カット）の撮影を行いました。しかし予定していた日程などの理由から約500点余の作品については未撮影となりました。研究期間3年間で通算約19000点余に関しての作業は終了したものの、みずのき作品群を網羅する作品調査、画像撮影を完了できなかったことは残念でした。

さて、3年間のアーカイブ・データ作成の作業を振り返って、2つの気づきについて書き、報告の結びとしたいと思います。

まず、作品裏面の持っている情報についてです。本研究では上述のように作品の描画面だけではなく裏面についても調査と撮影を行いました。作者自身によって記された名前、日付や天気などが、作者像を鮮明にする手がかりとなります。みずのき寮絵画教室の活動を主催された西垣籌一氏が裏面に書き残したメモからは当時の状況や作者への心遣いについて、出品選定を示す付箋からは選定の視線や判断の基準が読み解けます。裏面には描画面にはない様々な情報が含まれています。仮に裏面が何も記されていない白紙の状態であったとしても、この事実を記録することが重要であると思います。

次に、ローカル・ルール（申し合わせ）の重要性について触れておきたいと思います。撮影の工程や手順に関して、撮影の際に作品に添えるデータカードへの記載に関連するタテヨコ位置や上下の決め方、両面に描画されている場合の手順、採寸方法や描画材料の表記（これは特にローカルな表記であったと思います。描画材料欄に「O.P.（金あり）、MT2 or 墨?、（O.P.）」と書けば、作業に参加したメンバーには何が使われていると判断したかわかります。）について、撮影機材の立ち上げ手順、その日の撮影枚数や連番の確認の仕方等等。いくつかは文書化して参照ファイルとし、あるものは撮影機材に貼り付け、ホワイトボードに書き出しておく。実際の作業は、大学の授業期間を避けて夏季および春季の休業期間に博士課程彫刻領域の教室を借りて行いました。したがって年度ごとに作業参加メンバーの多くが入れ替わります。さらに午前9:00~12:00、午後13:00~16:00、16:00~19:00の3シフト制で複数のメンバーが入れ替わりながらの作業となるため、こうした申し合わせが果たした意味は予想以上にあったと感じます。いずれも今回のケースに特化したかなり具体的な申し合わせです。特に採寸方法や描画材料の表記についてはアーカイブの精度や方向性ともなる部分であり、汎用性のある先例や通例を参照すべきとの考え方もあり得たのかも知れませんが、作業上の様々な問題が起こるたびに立ち止まり、対象作品群の特質を踏まえた対処や工夫を検討しながら出来上がった集積であったと思います。

中原 浩大（美術学部教授）